

小説 水のような関係

「とりあえず、おうちに伺って、お話をさせていだいてもいいでしょうか」

そのような断りを入れて、私はKの家に外向きました。Kは真面目で物静かな、言葉数も少ない寡黙な青年でした。教室でも目立たず、野球部でも目立たない存在の彼が、どうして突然一週間も休んだのか、見当がつかなかったのです。

彼と私は座敷で向かい合いました。

「休んでいる間、何をしていたの？」

「……」

「クラスとか部活とかで、何かあったのかな？」

「……」

「勉強？」

これは愚問でした。彼は勉強で苦勞することはなかったのです。やはり

「……」

返事はありません。

ということ、私は出されたお茶を飲み、途方に

くれました。面談のときは、テーマを決めてお話しることになっているので、それに沿って質問なりすれば、一通りのことは話してくれますが、今回は、彼のお休みがテーマであり、それは彼にとっては、自分でもわけがわからない出来事で、彼自身も混乱の淵にいますから。

こうなれば、問わず語りです。この一週間の教室での出来事や、野球部の生徒さんたちが待っているであろうことなどを、一人でぼつぼつお話するので、それがどこまで彼に響いているのか、果たして聞いてくれるのかわかりません。誠実な人なので、こちらを向いてはいますが。

そのころの私は、まだ腰まで髪を伸ばしていたころでした。大学時代に付き合っていた彼が、髪の毛の長い女性の後ろ姿を見ては「美人だ」と感嘆の溜息をついたので、自分も美人だと言ってほしくて髪を伸ばし始めたのですが、そのうちに美しく伸ばすことが目的となりました。さすがに教師となってからは惰性でしたが、今思えば、その頃はいろんな意味で

まだまだ未熟だったと思います。もちろん今でも未熟ですが笑

未熟ゆえに、生徒との向き合い方も、手探りでした。そんな中で、当時手に入れた技法が「臨床動作法」でした。まだ生徒には使ったことはなかったのですが、研修に行つて冷や汗を流して学んでいることを、今、やってみるときがきたのだと、私の心の中で何かが叫んでいました。

「臨床動作法つてのがあるんだけど、すごく単純に、からだを少し動かすだけなんだよね。それで……何かが変わつたりするんだよね。時にはね。言葉がいらぬから気に入るんだけど。……よかつたら、やってみてもいいかな。どうかね」

彼が乗ってくるとも思えず、でも、半分以上は真剣に、彼に拙く説明しました。

「はい」

意外なことに、彼は素直に承諾してくれました。きつと、何も言葉にはしないものの、彼の中にも、今の事態をどうにかしたいという気持ちがあったの

でしょう。

そのころの私の一番得意な動作課題が、背中を「ペコ・ポコ」と押したり引いたりする「ペコポコ課題」でした。真剣にスタートです。やってるうちに、少し自分の緊張もほぐれます。「そう、そう」「うまい、うまい」「ここは動くけど、ここはちよつとむつかしいよね」などと言いながら、しばらく彼の背中に集中し、二人で協働して、静かな汗を流しました。

「じゃあ、今日は帰るね」

動作法を終えて、なんだか清々しく満足した私は、すぐに帰ろうと玄関先まで行き、靴を履こうとしました。するとそのときです。彼が私のところに歩み寄り、

「先生、明日から、もしも僕が学校に行つたら、みんなはどう思うでしょうか。変に思わないでしょうか」

と質問するのです。

「それはないと思う。みんなにとっては、いつもの日常が始まるだけで」

「野球部のみんなはどうでしょうか」

「変には思わないと思う。むしろ、喜ぶと思う。あなたのポジションを誰かが埋め合わせるのは大変だから」

私は、内心驚きながらも、淡々とことばを続けました。

「あなたが思うほど劇的なことは、何も無いと思う。」

翌日、彼は何もなかったかのように登校しました。私も、何もなかったかのように接しました。そう、何もなかったのです。動作法って、そのせいで何かが起こるほど大したことは何もしません。だからかどうか、当事者は、動作法の効果で変化したとは思わないことが多いのです。それどころか、主訴を忘れてしまったりするのです。

翌年私は文系の担任となり、理系の彼とはクラス担任も変わり、授業も持たなかったもので、彼が3年生は皆出席で卒業したということを後で知りました。有名国公立大学に入学したのですが、担任が変わって以来彼とは何も言葉を交わしていません。もちろん

ん、動作法については、あの日以来、二人ともまるでわざと回避しているかのよう、話題には出ませんでした。そういう、水のようなサラツとした関係も、動作法ならではの関係なのかもしれません。